“Crossing Brooklyn Ferry”考察

山　内　　彰*

A View on “Crossing Brooklyn Ferry”

Akira Yamauchi

要旨：19 世紀アメリカの詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）が『草の葉（*Leaves of Grass*）』第 2 版（1856 年）に初めて公表した“Crossing Brooklyn Ferry”という詩は、出版された当時から高い評価を得て、今日に至っている。この詩に関してはさまざまな解釈がこれまでなされてきたが、本稿はホイットマンが大きな関心を抱いていた、「私（“Me”）」と「私でないもの（“Not-Me”）」の観点からこの詩の分析を試みるものである。物理的な時間や空間を乗り越えようとした詩人が、いかにして詩的世界を構築したかを考察するとともに、そうした世界の成立にあたって描かれた虚構のあり方が、詩集を発表する以前にもすでに見られることを検証した。そして、このような虚構を通して培われた詩的世界によって、「私」の死という主体の崩壊を超克しようとする詩人の姿を追究した。本稿では、特に“Crossing Brooklyn Ferry”の冒頭と最後に注目をして、詩の分析を行った。

Abstract: The famous poem, “Crossing Brooklyn Ferry,” was first printed in the second edition of *Leaves of Grass* by Walt Whitman. This poem has not only been popular but also widely criticized and reviewed by many critics since its appearance. In this thesis, the poem is interpreted and analyzed in terms of Whitman’s view on the relationship between “Me” (the subject) and “Not-Me” (its objects). The poet tries to construct his poetic world to overcome the physical limits of time and space (the two threatening factors of identity). Combined with the analysis of Whitman’s early works such as his fictions, how the poet builds the fictional world in this poem, which guarantees the invalidity of death, is clearly depicted. This thesis focuses mainly on the first section and the last section of the poem.

Key words：ホイットマン Walt Whitman　アメリカ文学 American Literature　アメリカ詩 American Poetry　主体とその対象 Subject and its objects

I

『草の葉』（*Leaves of Grass*）の第 2 版（1856 年）に掲載された“Crossing Brooklyn Ferry”（第 2 版当初は“Sun-Down Poem”というタイトルが付けられていた。なお、本稿では以下“Ferry”と略記する）は、文学的にも、心理学的にも、文化論的にも、たいへん興味深い詩であり、これまでにもさまざまな研究が行なわれてきた（Coffman, Jr., Goodson, Harris, Blake など）。また、一般には『草の葉』第 2 版の新しい詩の中で最良のものだという評価が定着して

*関西福祉科学大学　社会福祉学部　准教授

いる（Allen 85）が、それだけでなく、この詩集が出版された当時も優れた詩であると認識されていた。たとえば、ソロー（Henry David Thoreau）はこの詩を高く評価して、友人に宛てた手紙で次のように記している。

> 私があなたへのお便りの中で書いている、あのウォルト・ホイットマンという人物は、現在私にとって一番興味のある対象なのです。ちょうど今彼の第 2 版を読んだばかりで（彼が私にくれたのです）、長いあいだ読んできたどんなものよりも、私の役に立っています。おそらく、覚えているかぎりでは、*Walt Whitman, an American* という詩［後の“Song of Myself”］と“Sun-Down Poem”［後の“Crossing Brooklyn Ferry”］が最高の詩だと思います。（Bloom 156）

このように、“Ferry”という詩は発表当時から一部の識者のあいだで高い評価を得てきたのであった。そして、当時の文学者のみならず、その後もさまざまな研究がこの詩に対して行なわれ、そうした研究においては実に多様で知的刺激に溢れた見解がそれぞれ示されてきている。しかしながら、本稿ではこの詩を詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）本人の思想との関係に焦点を絞って考察してみたい。すなわち、詩人が自分の世界観を表わすために、この詩を書いたのではないかという視点に立って分析を進めてみたいと思うわけである。

そして、ここでいうホイットマンの世界観とは、自己と非自己の関係を意味していると言い換えてもよい。つまり、「私（“Me”）」と「私でないもの（“Not-Me”）」の関係、あるいは、この現実世界と「私」とのあいだに見られる関連性ということである。彼は、こうした二項がお互いにどのような関連があるのかを、この詩を通して表わそうとしていたのではないかと思われる。別言すれば、ホイットマンは『草の葉』第 1 版（1855 年）の序文（Preface）で「人民は［……］詩人に現実と魂のあいだの道（“the path between reality and their souls”）を示すよう期待している」と記しているが、この詩人として求められる役割を果たそうとして書いたのが、“Ferry”という詩ではないかということである。すなわち、詩人にはこの現実界と魂の世界との媒介を行なう責務があると彼は考えていたわけだが、その媒介のあり様をこの詩によって表現しようとしたのだとも言えるだろう。

“Ferry”全体にわたって、詩人ホイットマンは、人間の精神とそれ以外の物質や人工物との関係をとらえてゆこうとしているのであり、この詩は初期のホイットマンにおける基本的な世界観がきわめて明瞭に示されていると言ってもいいだろう。そこで、本稿では、この「私」と「私でないもの」、または「認識する主体」と「その認識対象」について、詩人がどのようにとらえていたかを分析するために、“Ferry”の冒頭部分と最終部分に特に注目して考察してみたい。詩人の世界観がどのようにこの詩の中で表わされているかについて、以下、検証してみよう。

Ⅱ

“Ferry”という詩は、

> Flood-tide below me! I see you face to face!
> Clouds of the west—sun there half an hour high—
> I see you also face to face.（Bradley 159）

という詩行から始まる。この§1 の冒頭部分は、“Ferry”の詩の基本的な枠組を明示する重要な部分であると解することができるだろう。最初に、「私」は足元の「潮の流れ」を眺めている。そして、この冒頭で、「私（“I”）」は「あなた（“you”）」と出会っているわけだが、その出会い方には、次のような点にじゅうぶん注意を向ける必要があるだろう。

まず、感嘆符（「！」）が 2 回用いられている

ことからも分かるように、「私」はただ漠然と対象物を眺めているというよりは、ある種の感情を伴ってそれらと接していることになる。おそらくは、好奇心を、あるいは、ある種の感動をもって、川の景色を眺めているのであろう（そして、この好奇心をもって対象を眺めるという点は、次のスタンザでさらに明瞭になるので、そこでもう一度検証してみたい）。

ふたたび§1の冒頭に戻って、「あなた」とその対象物との関係について、考察してみよう。1〜2行目にあるように、ここで名指しされている「あなた」は、「潮流」であり、「雲」といった自然物である。そして、こうした自然物に「私」は「面と向かって」出会っていると表現されている。ストロム（Susan Strom）という批評家は、この「面と向かって（“face to face”）」という詩句が『聖書』の響きを感じさせるという指摘を、その論文の中で行なっている（Strom）。ストロムは、後の§9に登場する“fine spoke of light, from the shape of my head”（Bradley 165）という神のオーラをイメージさせる詩行と合わせて、このような解釈を提出しているのだが、その解釈はやや唐突な印象を受けるのではないだろうか。この冒頭部分を後のセクションに直接結びつけて解釈しなければならない必然性はないように思われる。さらに言えば、この冒頭部分で、聖書との関係をどうしても読み込まなければならない必要性もあまりないと言えるだろう。とすれば、ここは別の解釈をとるのが適切だと思われる。

では、この部分にどのような光を当てることがより適切な解釈につながるのだろうか。その答えを探るために、1856年に詩人自らが書いた自己批評文の次の部分を検討してみよう。ここで、彼は詩人が創造する詩的効果について述べている。

> 詩人が詩の中においてつくりだす効果は、芸術家や芸術のそれであってはならず、根源的な目と腕（“the original eye or arm”）がつくりだす効果、すなわち、実際の大気や樹木や鳥でなければならない。（Hindus 46）

このホイットマンの記述に見られるように、詩とは現実の生物や自然物と同等の効果を読者に与えるべきものであり、そのためには一人一人が自らの根源的な眼差しで事物を眺める必要があるというのが、詩人が本来言いたいことであった。すなわち、これまでの歴史や社会が作り上げてきた固定観念や定石的見方を取り払い、自らの目で事物を眺める必要があるのだというのが、ホイットマンの趣旨なのである。つまり、「面と向かって」という語句は聖書的なニュアンスを含んでいるのだと解釈するよりも、一人の人間が自分自身の目（“the original eye”）を通して対象を眺めるという意味なのだと考えるほうが、より適切な解釈であると言えるだろう。

そして、その「私」の認識の対象となっている自然物には、いずれも動きが含まれている点にも注意しなければならない。たとえば、「潮の流れ」には潮が流れてゆく動きが示され、「西方の雲」と「半時ぐらいの高さの太陽」には暮れゆく時間が含有されている。つまり、この冒頭部分で、「私」はたんに自然物と自分の眼差しを通して直接対面しているだけではなく、時間や動きを対象物の内部に直感しているのだとも言えるだろう。この時間と動きという側面は、“Ferry”という詩全体にとって重要な要素となっているが、続くスタンザでさらに鮮明なかたちで表わされている。

> Crowds of men and women attired in the usual costumes, how curious you are to me!
> On the ferry-boat, the hundreds and hundreds that cross, returning home, are more curious to me than you suppose,
> And you that shall cross from shore to shore years hence are more to me, and more in my meditations, than you might suppose.（Bra-

dley 159–60）

「私」の認識の対象は、初めの「潮流」や「雲」から、3 行目にあるように「男女」へと変化している。そして、こうした男女は「何百もの（“hundreds and hundreds”）」であるとか、「故郷へと戻りつつ（“returning home”）」であるとか、「岸から岸へと何年も後にわたっていくだろう（“you that shall cross from shore to shore years hence”）」といった語句に見られるように、繰り返しの運動や周期的な時間を想起させるものである。

そしてまた、前のスタンザにもあったように、ここでも感嘆符（「！」）が使われ、「私」がある種の興奮状態にあることが分かる。それだけではなく、このスタンザでは、さらに「興味深い（“curious”）」という感情につよく関係した単語が使用されることで、「私」が「対象物」に感激し、興奮し、たいへんな好奇心をもって接していることがうかがわれるのである。

つまり、“Ferry”の冒頭部分では、①「私」が対象を深い「興味」をもって眺めていること、②その対象には時間や動きが感じられること、の 2 点が示されている。そして、ここで言われている時間についてさらに詳細に考えると、二種類の時間が想定されていることが理解されるだろう。一つは、繰り返しを表わす周期的な時間であり、もう一つは直線的で、時制で表現されうるような、物理的時間である。この後者の物理的な時間は、最初の繰り返しの時間と深い関連性を有しており、両者はたんなる反対物というよりは、物理的な時間と繰り返しの時間とは重なって表現されるような関係にある。そして、このことは、“shall”という助動詞や“years hence”という直線的な時間表現と、“cross from shore to shore”という反復する時間表現とが併置されていることからもうかがわれよう。

§1 の最後の部分には、初めて読者を指示していると思われる「あなた」が登場する。こうした読者である「あなた」への呼びかけは、19 紀の新聞などで頻繁に見られた手法であり、『草の葉』以前のホイットマンがジャーナリストや新聞の編集者であったことを考え合わせると、ブレイク（David Haven Blake）も指摘するように、読者と編集者とのあいだに当時存在していた、両者の親密な関係が影響していることは間違いないだろう。ブレイクは、ホイットマン自らが書いた新聞記事を引用しながら、この問題について次のように述べている。

> おそらくはっきりと気づかれはしなかっただろうが、こうした行為［読者への呼びかけ］は 1846 年という早い時期から始まっており、その年は彼が『ディリー・イーグル』紙を編集した初めての年でもあった。彼は、同紙が新しい活字を使用し始めたことを紹介した論説のなかで、この性質を次のように賛美している－「読者はお気づきにならなかっただろうか？　新聞の編集者の心の中に湧き上がってくる、彼が仕える大衆に対する興味深い共感というものが存在していることを。」（Blake 148）

読者と編集者のあいだには「興味深い共感（“a curious kind of sympathy”）」というものが存在し、お互いのあいだに親密な特別の関係を作りだしていると、ホイットマンは主張している。こうした点をとらえて、ブレイクは、編集者と読者とのあいだにホイットマンが構築しようとした関係を、『草の葉』で使用されている「あなた」という読者への呼びかけの中にも見出そうとしているわけである。この見解は刺激的で、また、“Ferry”という詩を読む上でも大いに参考になるだろうと思われる。しかしながら、本稿では、文化論的背景から“Ferry”を読み込むのではなくて、できるだけホイットマンの詩や草稿から考察する手法を採用して、読みを進めてゆきたい。

さて、この「あなた」は、詩行にあるよう

に、「私」と同時的に存在しているのではなく、未来の存在として描かれている。だから、物理的な直線的時間の中で「私」が「あなた」に出会っているのではなく（物理の法則からして、現在の人間が未来の人間に出会うのは不可能である）、これはあくまでも「私の瞑想の内部で（“in my meditations”）」の遭遇として描写されている。言い換えれば、「私」の精神の内面での出会いであり、一種の虚構の世界での遭遇なのである。この虚構性は、続く「あなたが想定するかもしれない（“you might suppose”）」という仮定法表現の中にも見て取ることができるだろう。したがって、「私」と未来の読者である「あなた」との出会いは、虚構の内部において行なわれているにすぎないと表現できるだろう。しかし、この虚構性は明瞭に表現されているというよりは、暗示的に描かれており、虚構ではあるが、あたかも現実の出会いでもあるかのような錯覚を読者に与えている。ここに、ホイットマンが「私」と「私でないもの」を扱うにあたって考えた虚構を成立させるための技法を観察することができるだろう。

このように、ホイットマンは虚構を巧妙に成立させて詩の世界を構築している。詩人にはどのような虚構を作りだすかという決定権があるわけであり、その決定内容は場所や時間にまで及んでいる。こうした虚構を担う「私」がもっとはっきりした形で示されているものに、初期のホイットマンの小説がある。こうした小説の中で、「私」は、時間を自由に行き来できる存在として描かれており、もはや消滅し、失われた過去の物体であっても、「虚構（フィクション）」=「小説（フィクション）」の内部に蘇らせる力を有するものとして描かれていた。ホイットマンの初期の小説から、該当箇所を引用してみよう。

> Let me go to times and people away in the twilight of years past. It is the pen’s prerogative to roll back the curtains of centuries that can have a real existence no more, and make them live in fiction . . .（Brasher 292）

この部分でホイットマンが述べているように、「ペンの特権（“pen’s prerogative”）」とは、時代を遡り、「もはや実体を持たなくなった（“that can have a real existence no more”）」ものを「小説の中で蘇らせる（“make them live in fiction”）」力とでも表現できるものであった。この小説での説明を借りれば、“Ferry”の語り手も、自由に時間の中を移動する「特権」を有していると想定してよいだろう。そして、1845年のこの小説とはちがって、1856年の“Ferry”の中では、さらにこの「特権」は拡張され、「私」は過去に対してのみならず、未来に対しても、「実体を持たない」存在を「虚構の中で生かす」ことができるようになっているのである。

ホイットマンは、このように「ペンの特権」を活かすことにより、虚構を巧みに作り上げ、「瞑想の中で」という条件をつけながらも、あたかも現実に「私」と未来の読者である「あなた」が出会っているような錯覚を効果的にもたらすことに成功していると言ってもよいであろう。「あなた」という人称代名詞が有する匿名性を巧妙に利用することにより、さまざまな人間を「あなた」の中に内包し、あたかも『草の葉』を読んでいる読者に直接詩人が呼びかけているような錯覚を生み出しているのである。そして、その効果によって、読者はホイットマンの詩の世界へと引き込まれてゆくのだとも言えるだろう。

Ⅲ

さて、次のセクションを見てみよう。ここでも、§1で示された、「私」と「私でないもの」の出会いという枠組が、二つの時間感覚の中でもう一度表現されている。

> The impalpable sustenance of me from all things at all hours of the day,

The simple, compact, well-joined scheme, myself disintegrated, every one disintegrated yet part of the scheme（Bradley 160）

「一日のすべての時間（“all hours of the day”）」という表現は、既述の時間感覚で言えば、直線的で物理的な時間を表わしている。また、「すべての物（“all things”）」が「私」の「微妙な栄養（“impalpable sustenance”）」として描かれ、「私」にとって「私でないもの」はすべて意味ある存在として実在していることが分かるだろう。つまり、物理的な現実の中に存在する「私」の認識対象は、すべて、「私」にとって一定の意義を有しているというわけである。そして、この部分は『草の葉』序文でホイットマンが語る、次の表現に相当していると考えてよい。

最高の詩人は［……］あらゆる出来事や感情や場面や人間の精神を、あるときにはより多く、あるときにはより少なく、聞いたり読んだりしている人間の個性と関連させてみる。（Bradley 718）

すべての「出来事」や「場面」は、それを読み取る「人間の個性と関連している」から、対象物はいずれも「私」の個性に関係づけられて認識されることになる。すなわち、「私でないもの」は「私」にとっていつも意味ある存在としてそこに現前し、「私」の「微妙な栄養」として機能するわけである。

そして、“Ferry”の次の行では、「私」とその他の人間との関係が示されており、「私」も「その他の人間」も個体としては確かに別々の存在ではあるが、どこかでつながっているもの（“yet part of the scheme”）として描かれている。したがって、この 2 行でホイットマンは、「私」にとって、「私でないもの」が不可欠な存在であることを指摘しているわけだ。だが、そればかりでなく、これらの詩行から分かることは、「私」が「私でないもの」より優位な立場にあり、「私でないもの」は「私」のための栄養素として存在しているということでもあろう。敷衍すれば、「私でないもの」という認識の対象物は、「私」によって一定の意味が汲み取られ、「私」の認識の役に立つ「栄養」なのである。

現実的で合理的な感覚からすれば、ふつう「私でないもの」と「私」が直接関係することはないし、物理的な枠組みの中で一致することもない。ところが、「最高の詩人」にかかると、こうした「私でないもの」が「私」と直接に関連性を有し、ある「枠組（“scheme”）」の中では連続して見えてくるわけである。要するに、「私」と「私でないもの」は物理的な時間や法則でとらえられる関係性以上の関連を持っているということになるだろう。

これを時間という側面から眺めれば、物理的・現実的・合理的な直線で示される時間に対して、別の時間感覚がはたらいていることになるだろう。じじつ、ホイットマンは独特の時間感覚を有しており、彼の考えによれば、万物は完成へ向けて動き続けているものであって、時間とは決して一直線に無目的に続く存在ではないのであった。

that lesson for man and woman which Nature shows throughout—of continual development, of arriving at any one result or degree only to start on further results and degrees. Invisibly, inaudibly, after their sorts, all the forces of the Universe, the air, every drop of water, every grain of sand, are pulsating, progressing.（Furness 123）

この草稿に見られるように、あらゆるものは「連続した発展（“continual development”）」であり、「宇宙のすべてのちからは［……］鼓動し、前へと進化している（“all the forces of the Universe . . . are pulsating, progressing”）」ので

ある。先へ先へと飽きることなく進んでゆくことが宇宙の法則だと、詩人は考えていたのであった。

また別のホイットマンの記述を見れば、現在・過去・未来という物理的な時間軸は分裂しているというよりも、結びあっていると彼が考えていたことが分かる。たとえば、次の文章にあるように、すべては連続しており、そして、この連続のほうが物理的な法則より優位に立っていると考えられている。ホイットマンは、『草の葉』序文で、次のように書いている。

> ごくわずかに表現しただけでも、最良のものを表わしたのであり、やがてこの上なく明かに表わされることになる。過去も現在も未来も分裂しているのではなくて、結びあっている（“not disjoined but joined”）のである。（Bradley 718）

詩人によれば、過去、現在、未来というものは「分裂（“disjoined”）」してあるのではなく、「結びあって（“joined”）」存在しているのだ。言い換えれば、「私でないもの」は「私」の「栄養」としてあるかぎり、両者の関係性は物理的な直線的時間によっては解消されることはない。なぜなら、「私」と「私でないもの」が属している時間は、こうした直線的な時間ではなくて、完成を目指して突き進んでゆく特殊な時間のほうだからである。

ホイットマンの別の言葉を使えば、「物質的なものは、すべて精神的なもののためにある」と考えられ、しかも「両者は興味深いかたちで混合する（“they blend curiously”）」（Grier 1392）ということになる。だから、直線的な時間と完成を目指すために繰り返される時間とは対立しているというよりも、直線的な時間が完成を目指す時間の内部に包摂されるかたちで、「混合」しているのである。

その点を、さらに“Ferry”の次のスタンザで見てみよう。

> The similitudes of the past and those of the future,
> The glories strung like beads on my smallest sights and hearings, on the walk in the street and the passage over the river,
> The current rushing so swiftly and swimming with me far away,
> The others that are to follow me, the ties between me and them,
> The certainty of others, the life, love, sight, hearing of others.（Bradley 160）

この冒頭にある「過去の類似と未来の類似（“The similitudes of the past and those of the future”）」という詩行は、物理的な直線的時間の感覚に基づいているのではなくて、ホイットマンが唱えるもう一つの時間に基づいてとらえられなければ、意味を成さないだろう。過去と未来の「類似」というのは、言い換えれば、過去も未来も、現在という起点（ここに詩の中の「私」が存在している）の内側に「混合」されているということなのである。この「類似しているということ（“The similitudes”）」が、過去と現在と未来の区別を消失させるだけでなく、“Ferry”の§1にあった、周期的な時間とも関係づけられるはずである。この点について、もう少し明確に表現されているものとして、1850年代に書かれたと推測されている別の詩の草稿を検討してみよう。

> （in Poem of Existence
> We call one the past, and we call another the future
> But both are alike the present/
> It is not the past, though we call it so, —nor the future, though we call it so,
> All the while it is the present only—both future and past are the present only,—/（Grier 1339）

わたしたちはあるものを「過去（“the past”）」

と呼び、別のものを「未来（“the future”）」と呼んではいるが、それらはいずれも「現在と似ている（“both are alike the present”）」のだから、結論として言えば、過去も未来も存在していないはずだと、ホイットマンは語る。過去と未来の現在に対する類似性ゆえに、それらは現在という時間の内部と混合されてしまうのである。そのことを別のかたちで表現すれば、過去も未来も、その「現在との類似」のゆえに、繰り返しにすぎないことになるだろう。さきほど登場した進歩のためにひたすら前進を続けるという時間のあり方は、今も昔も変わらず万物を貫いている時間感覚であり、その意味からすれば、すべては周期的に繰り返されているのだと言えるだろう。

ここで、ホイットマンが一つの思想を示していることに注意を向けねばならない。すなわち、人間にとって知る必要があるのは、「私でないもの」がなぜこの世界に存在しているかという疑問であり、「私」と「私でないもの」は、お互いにどのような関係があるかという問題である。そして、このことは今検討したように、3 つにおいて「類似」が見られる以上、過去、現在、未来のように区別して把握する必然性はないということになる。言い換えれば、人間の本質というものは、歴史によっても変化を蒙ることはないという思想が基盤に置かれているとも言えるだろう。さらに、別のところで、ホイットマンは、

> “But is man’s nature changed, either by a progress from the savage to the civilized state, or by a release from civilization to savagism?” — “No! Man is the same in all his essential qualities . . .”（Holloway 196）

とも書いている。ここには、いわゆる西洋近代化による未開から文明への発展史観が見え隠れするが、文明や未開のように変化があったとしても、「人間の本性は変化しない（“Man is the same in all his essential qualities”）」のだと、詩人が考えていることが分かるだろう。ホイットマンによれば、人間の本質とは不変なのである。

さて、“Ferry” に戻ろう。§2 の 9 行目には「ビーズ（“beads”）」の比喩が登場してくる。この「ビーズ」とは一つ一つの事物（対象物）を暗示したものであり、「ひも」は時間軸だと考えることができるだろう（Orlov 13）。「私」が出会う「私でないもの」は、時間軸の上で「栄光（“glories”）」を纏い、光り輝いている。人間は、過去においてもこうして一つ一つの対象物を理解してきたのであり、その点は未来においても何の変化もない。「私」は「通り」や「川」で多くの人間や事物と遭遇し、その一つ一つを「自分の目で」見て、理解する。このあり方は、あらゆる時代で変化することなく、歴史貫通的に見ることのできる、人のあり方だと、ホイットマンは主張しているのである。つまり、その点からすれば、人間は繰り返し同じ生き方をしていることになるだろう。

もちろん、未来において川を眺め、渡しを渡る主体は、現在の「私」とは別の人物であろう。けれども、経験の対象となる自然物には変化がないし、一つ一つの対象に関心を抱き、自らの目でじっと眺めるという、人のあり方にも変化は生じない。対象物を好奇心をもって認識し、そこから「私」にとっての意義である「栄養」を摂取するという行為も、いっさい変わらないだろう。

つまり、「私でないもの」は、いかなる時代・民族においても、「私」にとって意味を感じさせる存在であり、「私」に世界との関係性を直感させる契機なのである。このことを、ホイットマンはある新聞記事の中で、次のように書いている。こちらのほうが散文調であることも手伝って、分かりやすいかもしれない。

> A hundred years hence, I often imagine, what an appearance that walk will present, on a fine

summer afternoon! You and I, reader, and quite all the people who are now alive, won't be much thought of then ; but the world will be just as jolly, and the sun will shine as bright, and the rivers off there—the Hudson on one side and the East on the other—will slap along their green waves, precisely as now ; and other eyes will look upon them about the same as we do.（Hindus 350）

「私」は、「読者（“reader”）」とともに、「百年後（“A hundred years hence”）」の世界を「想像する（“imagine”）」。それは、「晴れた夏の午後（“a fine summer afternoon”）」であり、感嘆符が付されていることからも理解できるように、好奇心をもって眺められた対象でもある。その百年後には、今こうして川辺にいる人々のことも、「もはやほとんど忘れ去られている（“won't be much thought of then”）」だろう。しかし、対象物たる「太陽（“the sun”）」や「川（“the rivers”）」はいっさい今と変わることなく、そこに存在し、「わたしたちがしているのとほぼ同じように（“about the same as we do”）」、百年後の人々もそうした「事物に眼差しを注ぐだろう（“other eyes will look upon them”）」。

喜びとともに対象物を人が受け取るならば、そして、人が対象物と自分の目で向き合っているのならば、経験の主体は交代するとしても、人間は他者と類似した経験を感じ取り、そこから同じような「栄養」を吸収することができる。「私」が未来の誰かと交代するとしても、あいかわらず「私」と「私でないもの」との間にある関係性は不変なのである。そして、この関係性がいっさい変わらないということは、“Ferry” の 12 行目に「確実さ（“the certainty”）」という言葉があったことからも分かるように、ホイットマンにとって紛うべくもない真理なのであった。

このように、「私」と「私でないもの」が永遠に変わらぬ関係を有していることが確実であるならば、「私」という主体が別の他者によってとって代わられたとしても、依然として、その関係性は保たれることとなる。言い換えれば、「私」と「他者」は同じ体験と感情を共有するのであり、「私」と「私に続くこととなる他者（“The others that are to follow me”）」のあいだに「絆（“the ties”）」が結ばれていることになるだろう。もちろん、こうした「絆」は現実的・物理的時間の枠内で結ばれているというよりも、心理的・精神的な時間軸にそって理解されるべきである。過去・現在・未来のように一方的に流れ、不可逆な物理的時間を想定していては、こうした「絆」に積極的な意義を見出すことは難しいだろう。しかしながら、「私」と「私でないもの」の関係性がいつの時代においても保たれているという、周期的・反復的な時間に照らしてみれば、間違いなく「絆」が生まれ、「私」と「私に続くことになる他者」とのあいだに共通性が見られることも明らかである。「私」が対象物を好奇心をもって「自らの目で」眺めたように、これから来るであろう「他者」もそうするのであれば、そこには物理的時間を超えた、両者を繋ぐ特別な時空が開かれてゆくことになるだろう。そして、この点は、§3 の 22 行目にある「ちょうどあなたがするように…私も…（“Just as you. . . , I . . .”）」という構文の上で鮮明に表現されている。「私」の行動と、読者たる「あなた」の行動は同じであり、そこで共有される「私でないもの」という対象物によって、なぜそこにこうした対象物が存在するのかを理解することが可能となるのである。さらに言えば、そこから世界の存在意義を、あるいは、人間の魂の意義を考察することさえできるようになると表現してもいいだろう。そして、この点こそが、ホイットマンが目指しているものであり、物理的な時間の隔たりを超える両者の遭遇こそが、彼の主張したい要諦なのである。

この点について、もう少し分析してみるため

に、彼の別の詩（“With Antecedents”）にある、次の個所を検討してみたい。

I know that the past was great and the future will be great,
And I know that both curiously conjoint in the present time,
（For the sake of him I typify, for the common average man’s sake, your sake if you are he,）
And that where I am or you are this present day, there is the centre of all days, all races,
And there is the meaning to us of all that has ever come of races and days, or ever will come.（Bradley 241）

「過去」も「未来」も、「興味深い形で現在の中に結合している（“both curiously conjoint in the present time”）」というのは、上で述べてきたように、いずれにおいても、「私」と「私でないもの」の関係性が変化しないからである。「私」と過去や未来の「他者」は、この関係を繰り返すという「類似性」の中で出会う。過去においては過去の、現在においては現在の、未来においては未来の、それぞれの時代にそれぞれの民族が生きているのであり、その意味では別々の存在に思えるかも知れない。しかしながら、「私」がいずれの民族・時代に属していようとも、「私」と「私でないもの」の関係が変化することはない。「私でないもの」は、「私」にこの世界の存在意義を伝えるものであり、魂の存在の確証を付与する「栄養」なのである。なるほど現在が過去より優位にあるとしても、万物はさらなる完成を目指して上昇運動を継続する以上、過去と現在のあいだに決定的な差異はない。「私」でないものは「私」に対してつねに同じはたらきをするのであり、そのことは、先にも引用したように、“Ferry”の詩の中で「これらと他のすべてのものは、今あなたにとってそうであるように、私にとっても同じであった」（Bradley 162）という詩行によって鮮明に表わされている。

このように、ホイットマンの考えによると、世界を認識する「私」という主体は時代によって交代するが、その世界との関係性は変化することはないということになろう。§4 の 53 行目の「私は今日、今夜、ここで止まりはするが、そうした時代は来るだろう（“The time will come, though I stop here to-day and to-night”）」という詩行は、まさにこのことを示している。「私」がこの詩を書き終え、「私」の存在が消滅し失われてしまうとしても、必ず「私」と共通の体験をする「他者」が現われる「時は来る（“The time will come”）」のである。過去に生きた人間が「自分の目で」対象物を眺め、その意義を思索したように、また「私」が今この詩を書きながら思索するように、未来の人間もかならず「私でないもの」を眺め、その意義を知り、そこから「栄養」を吸収する。過去の人間や、現在の「私」や、未来の「他者」といった主体の交代はあるとしても、それぞれの主体が行なう経験の構造は同じであり、その類似はあらゆる分野に及んでいる。この構造は、§6 にもあるように、「悪」の領域にまで適用され、誰かが遭遇した「悪」は、「私」においても、類似した経験として把握される。

とすると、ホイットマンのこの考え方に従えば、人間は物理的な時間を乗り越える能力を有していることになるだろう。物理的な直線的時間という客観的制約にもかかわらず、「私」は他者との経験の類似性によって、別の時代や時間の経験を生きてもいるのだ。そして、この時間感覚は、まわりの景色や、他人や、「煙突」のような人工物といった、さまざまな「私でないもの」を、「私」が考察し、その意味を考えることによって、生まれてくるものなのである。

You have waited, you always wait, you dumb, beautiful ministers,
We receive you with free sense at last, and are

insatiate henceforward,
Not you any more shall be able to foil us, or withhold yourself from us,
We fathom you not—we love you—there is perfection in you also.
You furnish your parts toward eternity,
Great or small, you furnish your parts toward the soul.（Bradley 165）

「おまえたち、黙ったままの美しいもの（“you dumb, beautiful ministers”）」という難解な詩行は、以上の文脈で解釈されれば、その意義が明確になるだろう。すなわち、「私」が認識し、思索を行なう対象である「私でないもの」は、「黙っている（“dumb”）」が、同時に「私」の「役に立つ（“minister”）」存在なのである（Miller 88）。そして、この部分は、『草の葉』序文の「人々は詩人に物言わぬ現実の対象（“dumb real objects”）につねに伴っている美と威厳以上のものを示すように期待する」（Bradley 714）という文章と重ねて理解することが許されるだろう（Dougherty 153）。「私でないもの」は、「私」にとって思索の対象であり、そこから「私」はすべてのものが「完璧」を目指して存在していること、「永遠」を目指して存在していることを知るのである。対象物は「私」にそうした真理を教えてくれる契機として、「私」の「役に立つ存在」なのである。

Ⅳ

“Ferry”という詩の中でホイットマンが考えた問題は、「私」にとって世界とは何なのか、「私」にとって「私でないもの」はどうして存在しているのかという認識論的問いだったと言ってもよいだろう。そして、この問いは『草の葉』第1版ですでに問題となっていたものであり、それを彼は「現実と魂のあいだの道」と表現していた。「私」という人間がこの世に存在していること、そして、その存在はやがては物理的な崩壊によってこの世から消失してしまう事実が、詩人の最初期からつよく彼の心をとらえていた問題であった。この問いを思索する際にホイットマンが用意した答えというのが、この世界が決して物理的側面だけからできているものではないという確信であり、すべてのものは魂に至る道を指し示しているはずだという想念であった。言い換えれば、この現実世界は、「私」にとって有機的で有意味な存在としてこそ、そこにあるはずだという信念なのである。

したがって、ホイットマンがとらえる対象についての意識は、物理的な側面と、「私」によって意味づけられた精神的側面とから成り立っているのである。そして、この二つの側面に応じるかたちで、二つの異なる時間が感じ取られてくるのだろう。一つは物理的で直線的な時間であり、そこではいかなる主体といえども、いつかは崩壊してゆく運命にある。残る一方の時間は、これとは著しく違った時間であり、直線的な時間が有するアイデンティティの消滅という脅威は抹殺され、過去も未来も現在へと集約し、「私」に意味あるかたちで「私でないもの」が現われてくるのである。この時間は、すべてのものが究極の完成を目指して動き続ける時間であり、ある時期における完成も、次の瞬間にはさらに高いレベルを目指した完成によってとって代わられ、この運動は停止することがないのである。そして、その運動が意味するところは、つねに世界は「私」にとって意味ある存在だということであり、その点だけを見れば、普遍的な真理である以上、どの時代をとっても繰り返される、周期的な運動だとも表現できるだろう。

ホイットマンがフェリーから眺めている群衆の動きは、まさにこの運動を象徴していると言えるだろう。現在群衆が次々に連続して移動しているように、明日もまた多くの人間が同じように移動し、さらにまた次の日もこの運動は繰り返されるはずである。そこから湧きあがってくるのは、周期的な繰り返しへの想念であり、物理的なレベルの時間感覚ではとらえることの

できない、未来と現在との連続した感覚なのである。

そして、彼は「私でないもの」を「原初の目（“the original eye”）」で眺めるならば、必ずこの感覚にたどりつくはずだと信じていたことになる。言い換えれば、この感覚を世界の中に見出すこと、「私でないもの」がもつ意義を発見することこそ、魂に至る道を理解することにつながるのだと考えていたわけだ。そして、この周期的な特殊な時間の中では、すべてのものが「私」に関連付けられており、これまで出会ったことのない他者であっても、この連続の中で「私」と深い関係にあるものとして出現することになる。

この、物理的側面を超越した、あるいは理性的な把握を超えた認識こそ、ホイットマンが求めているものであり、人々に示そうとしたものだと言ってもよいだろう。第 1 版では序文の中で展開され、第 2 版では本稿で分析した“Ferry”という詩として表出された、特別な「絆」は、第 3 版では「カラマス（Calamus）」詩群として表現されることになる。その意味からすれば、“Ferry”は直接にカラマスの意図と通じていることになり、いずれの場合も、精神的な時間の枠組の内部でなら、人はすべての制約から解放され、どのような他者とも交流できるし、この世界の意味を理解することができるということになるだろう。

「現実と魂のあいだの道」を理解すれば、人は「私」と「私でないもの」の関係を把握し、世界と自己が、あるいは、自己と他者が、お互いに特別な「絆」を有している点に気づくことになるのである。この点をホイットマン自ら、カラマス詩群と組み合わせるかたちで、次のように記している。

> I say, the subtlest, sweetest, surest tie between me and Him or Her, who, in the passages of *Calamus* and other pieces realizes me—though we never see each other, or though ages and ages hence—must, in this way, be personal affection.（Bradley 751）

カラマス詩群と同じように、時代が違おうとも、「私（“I”）」と「他者（“Him or Her”）」とのあいだの「絆（“tie”）」は目には見えないほど「きわめて微妙で（“subtlest”）」はあるものの、同時に「最も確かな（“surest”）」ものであり、両者のあいだを間違いなく繋いでいるのである。「私」と「他者」は「お互いに出会うことは決してない（“we never see each other”）」し、あるいは「幾年も時代が隔たっている（“ages and ages hence”）」のだが、そうであってもお互いのあいだに存在する「絆」は、「私」が彼らを「個人的に愛している（“personal affection”）」と表現できるほどに強いものなのである。そして、この点は「カラマスの詩群において（“in the passages of *Calamus*”）」表現されたのであった。

とすれば、ホイットマンが“Ferry”という詩の中で企てたことは、「私」と「私でないもの」の関係を、物理的時間という壁を乗り越えて理解しようとしたことだと言えるだろう。「私」のアイデンティティは死によって消滅してしまうであろうが、「私」と世界の関係性は存続し続け、周期的な時間の中で「他者」の経験と「混合」され、世界の意義を人々に伝え続けるのである。そして、この関係性を読者とのあいだに「虚構」を通じて構築し、明確なメッセージとして表出することこそ、詩人の役割なのだとホイットマンは信じていたのだろう。

かくして、主体の消滅（死）という問題は第 2 版において一定の解決を見出すことに成功し、第 3 版のカラマス詩群において、いっそう力強く訴えられることになる。しかしながら、こうして主体の消滅に関心を抱き続けること自体、いかに詩人にとって「死」が不気味なほど強大な存在であったかを暗示しており、事実、この一見乗り越えられたかに思われた問題は、南北戦争を機にふたたび前面に出てくることに

なる。だが、死が「私」のアイデンティティにもたらす恐怖という、この問題についてはまた論を改めて考察することにしたい。

参考文献

Allen, Gay Wilson. *The New Walt Whitman Handbook.* New York UP, 1986.

Blake, David Haven. *Walt Whitman and the Culture of American Celebrity.* Yale UP, 2006.

Bloom, Harold ed. *Walt Whitman.* Yale UP, 2008.

Bradley, Sculley and Blodgett, Harold W. eds. *Leaves of Grass* by Walt Whitman. W. W. Norton & Company, 1973.

Brasher, Thomas L. ed. *The Early Poems and the Ficiton* by Walt Whitman. New York UP, 1963.

Coffman, Jr., Stanely K. “‘Crossing Brooklyn Ferry’ : A Note on the Catalogue Technique in Whitman’s Poetry,” *Modern Philology* LI, 4, May 1954 : 225–232.

Dougherty, James. *Walt Whitman and the Citizen’s Eye.* Louisiana State UP, 1993.

Furness, Clifton Joseph. *Walt Whitman’s Workshop : A Collection of Unpublished Manuscripts.* Reprint Services Corp, 1928.

Goddson, Lester. “A Footnote on Whitman and Time,” *Walt Whitman Review* 17, 2, June 1971 : 54–5.

Grier, Edward F. ed. *Notebooks and Unpublished Prose Manuscripts* by Walt Whitman. New York UP, 1984.

Harris, Marion. “Nature and Materialism : Fundamentals in Whitman’s Epistemology,” *Walt Whitman Review* IX, 4, December 1963 : 85–8.

Hindus, Milton ed. *Walt Whitman.* Routledge, 1997.

Holloway, Emory ed. *The Uncollected Poetry and Prose of Walt Whitman.* Doubleday, Page & Company, 1921.

Leypoldt, Günter. *Cultural Authority in the Age of Whitman : A Transatlantic Perspective.* Edinburgh UP, 2009.

Miller, Jr., James E. *A Critical Guide to* Leaves of Grass. The U of Chicago P, 1957.

Orlov, Paul A. “On Time and Form in Whitman’s ‘Crossing Brooklyn Ferry,’” *Walt Whitman Quarterly Review* 2, 1, Summer, 1984 : 13–4.

Reynolds, David S. *Walt Whitman’s America : A Cultural Biography.* Knopf, 1995.

Rubin, Joseph Jay. *The Historic Whitman.* The Pennsylvania State UP, 1973.

Strom, Susan. “‘Face to face’ : Whitman’s Biblical Reference in ‘Crossing Brooklyn Ferry,’” *Walt Whitman Review* 24. 1, March 1978 : 7–16.